

李花亭文庫本堤中納言物語

ごその系統について

土岐武治

して、左に此等の諸本をば簡略に解説することにする。

一、李花亭文庫本

本書は石川県立図書館内李花亭文庫所蔵藤岡作太郎博士旧蔵本で、博士は生存中大阪「しかま書肆」よりこれを購入されたものだと言へられてゐる。本の形は美濃紙袋綴ぢで、その大きさは縦一八・五糎、横二六・五糎、上下二冊からなり、各冊とも題簽なく、直接表紙の左側に「堤中納言物語上」（上巻）、「堤中納言物語下」（下巻）、と題号を記入してある。片面九行、一行の字数は二十字内外、歌は行を改めて二分下げ、二行に書いてある。上巻は墨付四十二枚、下巻のそれは四十七枚で、そのうち、上巻最初の二枚には、藤岡作太郎博士自筆による堤中納言物語の「異本のこと」「年代撰者のこと」「体裁のこと」に関する端書が見え、又第三枚目の表には、次の如き配列順序で、本物

堤中納言物語の現存諸写本には、その本の冊数上十冊、

三冊、二冊、一冊との四種類あるが、それらの中で二冊の本となつてゐる写本には、(一)李花亭文庫本、(二)久原文庫蔵阿波国文庫旧蔵本、(三)刈谷図書館蔵村上忠順本、(四)静嘉堂文庫旧蔵山田常典本、(五)東京教育大学蔵横山由清本、(六)静嘉堂文庫蔵横山由清本、(七)東北大学図書館蔵狩野文庫本、(八)藤井乙男博士旧蔵本、(九)日本大学図書館蔵上田万年博士旧蔵本など見えるが、この九種類の写本中で、李花亭文庫本、藤井乙男博士旧蔵本、刈谷図書館蔵村上忠順本及び冊数上一冊なる旧第三高等学校蔵本との四写本とは、いづれも本の内部的、外部的諸条件は頗る近似し、此等写本相互の間には血族の依存關係を有してゐるやうに考へられる。今、以上の四写本に於ける同類關係を具体的に論証する前提と

語の目次が記載されてゐる。

花樓折少将 このついで

虫めつる姫君 ほと／＼のけさう

逢坂こえぬ権中納言 かひあはせ

思はぬかたにとまりする少将

縹女御 はいすみ

よしなしごと

右の十篇中、「逢坂こえぬ権中納言」までが上巻で、以下は下巻となる。本書には校合、頭註など施されてあるが、これらは藤岡作太郎博士が上野図書館蔵神原本（一冊）を以て校合し、又同写本に見える伴直方（一八四二歿）の頭註をこれに転載し、その上、博士の註を更に若干これに加筆したものである。「よしなしごと」の「冬ごもる空のけしきに……」の末尾文並びに奥書は見えない。

二、藤井乙男博士旧蔵本堤中納言物語

本書は清水泰教授蔵藤井乙男博士旧蔵本で、上下二冊となつてゐる。本の形は美濃紙袋綴ぢで、縦二六・七糎、横一八・五糎の大きさに、表紙の左側に見える題簽には、上巻「堤ものがたり上」下巻「つゝみ物語下」と書かれてある。片面九行、一行の字数は二十字内外で、歌は行を改め、二分下げで書き、各冊とも紙を改め、章名はその篇の最初に、本文より二分分余り下げ一行に之を書下してある。

李花亭文庫本堤中納言物語とその系統について

上巻は墨付三十九枚、下巻のそれは四十七枚で、うち上巻の第一枚の表には次の如き配列順序で、本物語の目次が記載せられてある。

花樓折少将 このついで

虫めつる姫君 ほと／＼のけさう

逢坂こえぬ権中納言 かひあはせ

思はぬかたにとまりする少将

縹女御 はいすみ

よしなしごと

右の十篇中、「逢坂こえぬ権中納言」までが上巻で、以下は下巻となる。「よしなしごと」の「冬ごもる空のけしきに……」の末尾文及び奥書はない。

三、刈谷図書館蔵村上忠順本堤中納言物語

本書は村上忠順（一八三二—一八八三）旧蔵本で、上下二冊となつてゐる。本の形は美濃紙袋綴ぢで、縦二七・三糎、横一八糎、題簽は表紙の左側にあり、上巻には「十帖冊子堤中納言物語上全」、下巻には「かいあはせ堤中納言物語全」とある題簽の上に、更に新しく「堤中納言物語上」「堤中納言物語下」と記入した同形の題簽を貼付してあつたのを、昭和二十二年に岡崎師範学校樋口芳麿氏の進言に因り、上下各冊とも新しい題簽をば剥ぎ、それを元の題簽の右に並べ貼つてゐる。片面九行、一行の字数は二十字内外、歌

は行を改め二字分下げて二行に書いてある。墨付上巻三十九枚、下巻四十七枚となつてゐる。上下各冊とも第一枚目の表には「刈谷図書館蔵」「村上文庫」の朱印があり、本文の諸処には他の一本をもつて朱にて校合してある。「よしなしごと」の「冬ごもる空のけしきに……」の末尾文及び奥書がなく、又目次をも缺いてゐる。

三、旧第三高等学校旧蔵本堤中納言物語

本書は京都大学吉田分校所蔵旧第三高等学校旧蔵本で、文化元年（一八〇四）六月源滋吉書写による一冊の本である。本の形は美濃紙袋綴ぢで、縦二九、七糎、横二一糎の大ききで、題簽なく直接表紙の中央に、「堤中納言物語」と記され、片面十行、一行の字数は二十五字内外で、墨付六十七枚、最初の一枚の表には、次のやうな体裁で目次が記載されてゐる。

花さくらをる少将 このついで
むしめつる姫君 ほと／＼のけさう
逢坂こへぬ権中納言 かひあはせ
思はぬかたにとまりする少将 はいすみ
縹女御

よしなしごと

本文の諸処に虫喰があり、従つて本文不明な箇所もある。「よしなしごと」の末尾文「冬ごもる空のけしきに……」

二、このついで

こうはいのしたにうつませ給たきもの
〔考異〕(一)給―給に京大本、たまつし山田常典本、給し諸本。
おほしめされて侍に申させ給へとてそゝのかせは
〔考異〕(一)給へとて―給へと諸本
いみしくしたふかうつくしてさき／＼はある所に
〔考異〕(一)いみしく、いみしう諸本。(二)さき／＼は―とき／＼
日本大学本、とき／＼は諸本
たちとまらむ事ありていつるを
〔考異〕(一)たちとまらむ―たちとまらぬ諸本
十四五ばかりにやとみゆるうすいろのこまやかなる
〔考異〕(一)とみゆる―とそみゆるかみたけに四五すんはかりあまりてみゆる諸本
おさなき人の侍しにやりて
〔考異〕(一)侍しに―侍し直曆本、侍して京都大学本、侍して諸本
三、むしめづる姫君
あせち大納言のむすめ
〔考異〕(一)むすめ―御むすめ諸本
むくつけなるかはむしをけうすると世の人
〔考異〕(一)むくつけ―むくつけ、天理大学本(小)、伴信友本、山田常典本、直曆本、富士谷本、東北大学、むくつけし黒川本、むくつけて広島教育大学本、彰考館本。む

李花亭文庫本堤中納言物語とその系統について

の二百二十九字を缺いてあるが、六十七枚目の裏に次の如き奥書が見える。

此堤中納言物がたり一冊ある人のもてる本をもて写しぬところ／＼よめかたきしもきはめてそれなめりとおもふは書あらためしかとまたくよめかたきもすくなくならされはこと本を得たらむ時また／＼校合すへきにこそ

文化元年六月 源 滋 吉

二

諸本の系統的分類は、単に形状、装幀、装飾、跋文、奥書、書入等の外部的諸条件に拠つてのみ決定すべきものでなく、各写本に於ける本文の血族關係を主体に置くべきである。此の意味に於いて、前記の四写本の同族關係を立証するに当り、堤中納言物語の現存諸本には見えぬ此等四写本の共通本文を左に列記してみることにする。

一、花ざくら折る少将
めし／＼かともみつけてまつらてこそとの給へは
〔考異〕(一)いてまつらて―たてまつらて諸本
いふさりのわらははものいとよくいふものにて
〔考異〕(一)わらはは―わらはは藤井乙男博士本、神宮文庫本。はなには諸本。
わらははけしきみありきて
〔考異〕(一)わらはは―はなは諸本

つけく諸本。

あまひこなんとつけて
〔考異〕(一)なんと―なんと諸本。
くちなはくちをもたけたり
〔考異〕(一)くち―くひ諸本。
あみだ仏／＼さうせんのをやならんなさわきをうちわな／＼かし
〔考異〕(一)あみだ仏／＼―あみだ仏／＼とて諸本。(二)なさわきそを―なきさはきそと前田家天和本、図書院本(十冊)、なさきはきそ諸本。
よくみたまへいみしうよくにせて
〔考異〕(一)み給へ―は諸本。
みなたちぬらんとそあやしきやとて
〔考異〕(一)とそ―ことと島原本、天理大学本、図書院本、京都大学本、岩瀬文庫本、矢野旧蔵本、広島教育大学本、事の多和文庫本、ことそ諸本
いかてとてしかなと思て
〔考異〕(一)とてし―みまし天理大学本(小)本文ヲ缺ク伴信友本、みてし諸本

かくまでやつしたれとにく／＼などはあらて
〔考異〕(一)にく／＼みにく函崎文庫本、神宮文庫本、藤井乙男博士本一冊、みにくし藤延本、伴信友本、山田常典本、みにく／＼諸本。

あな心うそらこととおほしめす

〔考異〕(一)おほしめすーおほしめすか諸本。

〔考異〕(一)おほしりいきてまことに侍なりけりと申せは

〔考異〕(一)たちはしりーたちはしりて諸本。

御かほをみたまひつらんとしてさま／＼きこゆれば

〔考異〕(一)御かほをみたまひつらんー御かほ、見給へらんよ刈

谷文庫本(一冊)、御かほを見給へりつらんよ東北大学

本、御かほえみ給つらんよ九条家本、御か、見給つら

んよ前田家天和本、御かほを見給るつらんよ伴信友本、

御かほし見給つらんよ天理大学本、日本大学本、富士

谷本、御かほをみ給つらんよ諸本。

〔考異〕(一)かへしー返て事嘉永本、返して山田常典本、返事て

〔考異〕(一)かへしー返て事嘉永本、返して山田常典本、返事て

この人／＼かへしやはあるとしてしはしたち給へれと

〔考異〕(一)かへしー返て事嘉永本、返して山田常典本、返事て

東北大学本、返事諸本

人にぬ心のうちはかはむしの名をやとひてそ

〔考異〕(一)名をやとひてそーなをとひてこそ諸本。

四、ほと／＼のけさう

〔考異〕(一)我ーわれも諸本。

我おとらしといとみたるけしきともにて

〔考異〕(一)かみはきはかりーかみはきはかに元祿本、かみつき

かみはきはかりあるかしらつきやうたいなにも

〔考異〕(一)かみはきはかりーかみはきはかに元祿本、かみつき

〔考異〕(一)おそかめりーおそるめれ山田常典本、をそかめれ

刈谷文庫(一冊)、おそかめれ諸本。

ふけぬらんとてうちふし給へれ

〔考異〕(一)給へれー給へれと諸本。

いなやとうちなけきているに

〔考異〕(一)いなやーいさや諸本。

御けしきつねよりもいとをかしうこそみたてまつりはへ

れ

〔考異〕(一)いとをかしうーいとをしう諸本。

〔考異〕(一)まほしうーまほしく諸本。

心のはともおほしられわひしとおほしたるを

〔考異〕(一)おほしられーおほしられと前田家天和本、吉田幸一

氏本、おほししられと神宮文庫本、南葵文庫本、嘉永

本、多和文庫本。(二)わひしーやわひし藤井乙男博士本、

にやわひし諸本。

六、かひあはせ

〔考異〕(一)させーせさせ諸本。

いみしくおほしたまはりにけり

〔考異〕(一)おほしーおほへ黒川家本、おほく諸本。

ひめきみも心ほそくなりて

〔考異〕(一)心ほそくー心ほそく諸本。

〔考異〕(一)心ほそくー心ほそく諸本。

〔考異〕(一)心ほそくー心ほそく諸本。

〔考異〕(一)心ほそくー心ほそく諸本。

〔考異〕(一)心ほそくー心ほそく諸本。

〔考異〕(一)心ほそくー心ほそく諸本。

〔考異〕(一)心ほそくー心ほそく諸本。

李花亭文庫本堤中納言物語とその系統について

いき伴信友本、山田常典本、かみはきはき浜臣本、嘉

永本、東北大学本、多和文庫本、南葵文庫本、かみは

きはり神宮文庫本、富士谷本、かみはきはかり天理大

学本、日本大学本、黒川本、図書陵本、岩瀬文庫本、

矢野旧蔵本、直厩本、榊原本(十冊)、島原本、九条家

本(十冊)、広島教育大学本、彰考館本、吉田幸一氏本。

かみはきはかに諸本。

式部卿の宮のひめきみの事に

〔考異〕(一)の事にー刈谷文庫本(二冊)、の中に諸本。

〔考異〕(一)いか、ーいかに諸本。

御かたちめてたくた、おはしますらんや

〔考異〕(一)た、おはしーをはし諸本。

あなあさましいかてみたてまつらん

〔考異〕(一)いかてーいか諸本。

いかていひつきしなとおほしけるとにや

〔考異〕(一)とにやーとかや諸本。

五、逢坂越へぬ権中納言

れいの宮わたりをおとなはまほしうおほさるれと

〔考異〕(一)わたりをーわたりに諸本。

えもいはぬねともひにくして

〔考異〕(一)ひにーひき諸本。

御こゑのみたかくておそかめり

〔考異〕(一)たかくておそかめり

たちはしりてあなたにいぬいとほそきこゑして

〔考異〕(一)してーにて諸本。

はまくりうつせかいをひまなくまかせて

〔考異〕(一)はまくりーはまくりなと諸本。

た、ありしとくちそこはましく

〔考異〕(一)ましくーよして嘉永本、東北大学本、まして諸本。

あはれにおはしけるなどよろこひきはく

〔考異〕(一)なとーかなと諸本。

七、思はぬかたにとまりする少将

思のほかあは／＼しき身のありさま

〔考異〕(一)ほかーほかに諸本。

この右大将殿、少将は右大臣のきたのかたの御せうとに

ものし給へは

〔考異〕(一)右大将殿ー右大臣殿諸本

いつかたもかきりなかりける中／＼ふかきしもくるしか

りけれ

〔考異〕(一)けるーけるこそ諸本。

とし月もあはれなるかたはいと／＼をとるへき

〔考異〕(一)いと、ーいか、諸本。

八、はなだの女御

はちすのはなはまるか女院のわたりにこそにたてまつれ

〔考異〕(一)たてまつれーたてまつりたり諸本

御うへはさまにやにさせ給つるをは

〔考異〕(一)給つる―給へる諸本

とあれは八の君うらやましくもおほすなるかな

〔考異〕(一)八の君―九の君諸本

をみなへしの御かいたくあつくあれとて

〔考異〕(一)いたく―いたくこそ諸本

いかにおもふにかみやつかへいたしたて、

〔考異〕(一)みやつかへ―みやつかへに諸本

おもふ人もあまたありしかは

〔考異〕(一)あまた―また諸本

さならぬ人のむすめなどもはからるゝもあり

〔考異〕(一)はからるゝも―はからるゝ諸本

おかしとのゝこといひてたるこそおかしけれ

〔考異〕(一)おかし―おかしく諸本

九、はいずみ

いみしけにあやしうこそあらめ

〔考異〕(一)こそ―こそは諸本

さりけなくうちそはむきていたり

〔考異〕(一)さりけなく―さりけなくて諸本

いくらんとおもはさりつれ

〔考異〕(一)と―とこそ諸本

女はゆめのやうにうれしと思けり

いちかとにうつなるさはりにまれ

〔考異〕(一)さはりに―さかりに諸本

御かへりはうちによ

〔考異〕(一)うちに―うらによ諸本

とのやうな他本には見えぬ此等の共通本文、別けても「このついで」に見える「十四五はかりにやとみゆるかみたけに四五すんはかりあまりてみゆるうすいろのこまやかなる」又「はいずみ」の「女はそこにてしはしないり給そといへとてせひもしらすきしつくるほどなど」の本文に於ける傍線の箇所は、上述の四写本にはともに缺けてゐる点を指摘しえられるのである。

元来本物語の題号には「堤中納言物語」「堤中納言」「つゝみ物語」など三種の名称があり、又物語十篇の配列順序にも(一)契沖校本、(二)流布本、(三)元祿本、(四)天理図書館蔵岡本館本の四種類があるし、殊に現存諸本中には本物語「よしなしこと」の末尾文「冬ごもる空のけしきに……」の二百二十九字の見える伝本と、その末文を缺く伝本がある。現存諸写本中、此等四写本は共通して、題号は堤中納言物語、目次は流布の配列、しかも「よしなしこと」篇の末文を缺くもので、かのやうな内部的、外部的な諸条件の共通点からも叙上の写本を検討して、李花亭文庫本、刈谷図書館蔵村上忠順本、旧第三高等学校本、藤井乙男博士旧蔵本

〔考異〕女―この女諸本。

思はきていつら〜にそといひて

〔考異〕(一)いつら〜いつらいつさ函崎本、いつらいつら彰

考館本、

かゝみをもみすうちさうそきて

〔考異〕(一)かゝみを―かたみ嘉永本、かゝみ諸本。

女はせひもしらすきしつくるほど

〔考異〕(一)女は―女はそこにてしはしないり給そといへとて諸本。よしなしこと

女なかむしろなにやかややりたりける

〔考異〕(一)なにやかや―なにやかや一諸本。女なかむしろなに

やかややりたりける―缺ク函崎文庫本、伴信友本、山

田常典本、東北大学本、多和文庫本、南葵文庫本、浜臣本。

よしのゝのあなたにいゑもかな

〔考異〕(一)よしのゝ―よしのゝ山諸本。

みなうらにかるなるみつふさむしろにまれそこひかいり

〔考異〕(一)みなうら―みなをかうら慈延本、天照大学本、函書

陵本、前田家天和本、京都大学本、みなをかうら諸本。

〔二)そこひかい―そこに入江日本大学本、黒川本、直鷹本、

そこいる入江諸本。

こかねをへりにみかきたるにもあれ

〔考異〕(一)にもあれ―にも諸本。

の四写本を同一グループの写本群と認容して妥当であると考へられる。

次に之等四写本に於ける各冊の内容を一層精査して見れば、李花亭文庫本と刈谷図書館蔵村上忠順本とは、本文の枚数は共に上巻三十九枚下巻四十枚、片面九行で、しかも僅少なる特殊の異文を除く以外は、各行の字数、仮名漢字の字体まで全く同一である諸点より見て、此等四写本間に書写関係があつたやうに思はれる。たゞ刈谷文庫本では、上巻二十七枚目の裏片面即ち「ほど〜の懸想」の「れはいぬかくいふほとに……そのしるへしてつたへさせよ」の百八十字が二十六枚目の裏に重複の衍文をなし、その代り二十六枚目に該当すべき本文「うせたまひけるをり……おもふまゝにも」の百九十五字をば欄外に細書補填してゐるが、その本文は李花亭文庫本のそれと全く符合してゐるのである。この重複の衍文について考按するに、筆者は二十五枚目の表から、失念して二十七枚目の裏へ書写した直後、その誤に気がつき、その代り二十六枚目の本文を上述の如く上欄に加筆したものである。又同本下巻の四十七枚目の裏第一行目にあるべき「のねなみのうちよせしこへにたゝそへ侍しそ」といふ「よしなしこと」の最後の二十字の本文を缺いてあるが、これは筆者が四十七枚の表まで書写し、四十七枚目の裏に見える前述の二十字一行分を見落したものと

思はれるし、更にまた同刈谷本では、「はいずみ」の「我身かくかけはなれんとおもひきやたにやとすみはつるよに」と二行に書かれた歌の第一行目の下にあるべき「月」を一字脱落してをり、且つ本伝本には物語十篇の目次をも缺いてゐる。このやうに李花亭文庫本と刈谷文庫蔵村上忠順本とを諸方面から比較検討する時、刈谷文庫本は李花亭文庫本を親本となし、これを書写されたものだと思へざるをえない。

三

李花亭文庫本、刈谷文庫蔵村上忠順本(二冊)、藤井乙男博士本(二冊)、旧第三高等学校本とは同類写本群であり、しかも李花亭文庫本と刈谷文庫蔵村上忠順本とは親子関係を持つことについての考証は前述の通りであるが、此等四写本を校合すれば、藤井乙男博士本と旧第三高等学校本の本文は頗る相近似してゐる。李花亭文庫本、刈谷文庫蔵村上忠順本の同一本文が、藤井乙男博士本と旧第三高等学校本の該本文では共通異文を示してゐる個処は多々見えるが、今試みに右の本文関係を次に挙示して見ることにする。

一、花ざくら折る少将

(ありつるものゝをよひて(李、刈)
ありつるものゝ返よひて(藤、旧三))

(との給たはふれつゝもろともいゆふかた(李、刈)
との給たはふれつゝもろともいつかのみつる所たつねはや

(みなわすれはてはへるものを(李、刈)
みなわすれにてはへるものを(藤、旧三))

(よふけぬさきにとてかへらせ給(李、刈)
よふけぬさきにとくかへらせ給(藤、旧三))

(とれこえ給へれと(李、刈)
ときこえ給へれと(藤、旧三))

六、かひあはせ

(ことねりわらはは、はり(李、刈)

(ことねりわらはは、かり(藤、旧三)
いとものなけかしけなるに(李、刈)
いとものなけかしけなる(藤、旧三))

(すはまのみまかりなるを(李、刈)
すはまのみまかりなかを(藤、旧三))

(今日のありさまのみせ給へよ(李、刈)
さて今日のありさまのみせ給へよ(藤、旧三))

七、思はぬ方にとまりする少将

(そち、殿はいとぎうにいさめたまへは(李、刈)
そち、殿いときうにいさめたまへは(藤、旧三))

(かせのこゝちれいならぬなといへとの給へは(李、刈)
かせにやれいならぬなといへとの給へは(藤、旧三))

八、はなだの女御

(ことにまをにもあらて(李、刈)
ことにまをにはあらて(藤、旧三))

李花亭文庫本堤中納言物語とその系統について

とおほすゆふかた(藤、旧三)

二、このついで

(申させ給へとそゝのかせは(李、刈)
申させ申へとそゝのかせは(藤、旧三))

(このかひひとりのついでにあはれと思て(李、刈)
この御ひとりのついでにあはれと思て(藤、旧三))

(人のかたりし事こそ(李、刈)
人のかたりし事こそ(藤、旧三))

(いとけたかうたゝ人とはおほし侍らざりし(李、刈)
いとけたかくたゝ人とはおほし侍らざりし(藤、旧三))

三、

(かゝこのまたはねつけぬきて(李、刈)
かゝこのまたはねつかぬにて(藤、旧三))

(おにと女は(李、刈)
おにと女とは(藤、旧三))

(みてことゝの給は(李、刈)
みてことゝのたまへは(藤、旧三))

四、ほとゝの懸想

(どうの中将のことねり(李、刈)
どうの中将の御ことねりわらは(藤、旧三))

五、逢坂こえぬ権中納言

(中納言またまいらせ給はぬにや(李、刈)
中納言はまたまいらせ給はぬにや(藤、旧三))

(一今度ゆかしきかを(李、刈)
いまひとたひゆかしきかを(藤、旧三))

(人のとりてかきうつしとりて(李、刈)
人のとりてかきうつしたれば(藤、旧三))

九、はいずみ

(いかに思いくらんと(李、刈)
いかに思ひてらんと(藤、旧三))

一〇、よしなしごと

(たいのくにむしろたゝみたらひ(李、刈)
たいのくにむしろたゝみたらひ(藤、旧三))

(こまつかものいかほしくり(李、刈)
こまつかものいかほしうり(藤、旧三))

右の用例の本文では、藤井乙男博士本と旧第三高等学校本とは、恰も直接の血族関係をなす如く見えるが、実は旧三高本の奥書中に「此堤中納言物かたり一冊ある人のもてる本をもて写しぬ……」と記されてあるので、旧三高本の書写人源滋吉は、冊数上一冊の写本を書写したものであることが解り、従つて上下二冊からなる藤井乙男博士本とは直接な親子関係を有する伝本でないことも判明するのみならず、藤井博士本も旧三高本も、本文の諸処に他の一本をもつて校合してゐるが、それらの本文は李花亭文庫本、刈谷文庫蔵村上忠順本のそれと全く符合するので、上述の二写

本に於ける校合本は、李花亭文庫本か刈谷文庫蔵村上忠順本、又はこれと同一の写本をもつて校合したものと考へられる。尙、藤井乙男博士本には誤写、脱字など多く、旧三高本は諸処読みがたい難点を持つてゐる。

四

次に前述の此等四写本の特徴ある重要な本文を取上げて私見を開陳してみるが、最初にその語彙解釈上の問題にふれることにする。

○花ざくらをる少将

ゆふさりかのわらははものいとよくいふものにてことよくかたらふ

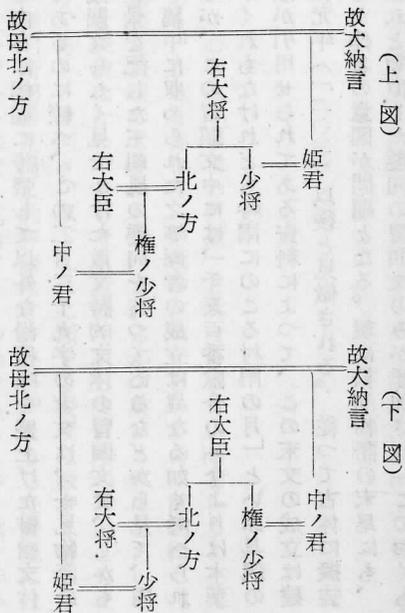
〔考異〕(一)わらははは藤井博士本(二冊)、神宮文庫本。はなには諸本。

(二) わらははけしきみありきていれたてまつり

〔考異〕(一)わらはははるく東北大学本、南葵文庫本。はな、山田常典本、多和文庫本、浜臣本、井上頼閑本、上野図書館蔵原本(一冊)、図書館本(一冊)。はほく函館本。はな伴信友本、内閣文庫本、大野広城本。はなは諸本。

右に見える本文「わらはは」の部分、函崎文庫本に「はほくく」、富士谷本に「はなは」とあり、共に他本を以て「わらはは」と朱書の校合を施し、直齋本には「はなは」と見え、

篇の人物関係は、次の上図の如くなり、又東北大学図書館蔵狩野文庫本「右大将のきたのかた御せうとに……」の本文に従へば下図のそれとなる。



藤岡作太郎博士は、当時所蔵の李花亭文庫本に「右大臣の子権少将(右大将北方の兄弟)中君に通ふ」と頭註してゐるが、これは博士がこの写本に上野図書館蔵神原本を校合してゐるので、その際、校合写本に見える上記の註に誘導されて、右の下図と同一な説を樹てられたのであらう。ところが、山脇毅氏は平安文学研究第十三輯所載「堤中納言物語私解二則」と題する中で「右大将の少将は、右大臣

その傍に衍敷の不審記号をなし、又図書館本では「本ノマ」とその右に朱註してあるほど、この個所は江戸時代の諸家にも難解であつたらしく、又従来の註釈書は、諸本に見える「はなには」「はなは」の本文を私意によつて「わらはは」の誤写と改めてゐるが、李花亭文庫本及びその系統本の本文に従ふ時は、全くこの難点も氷解されるのである。

○思はぬ方にとまりする少将

この右大将殿、少将は右大臣のきたのかたの御せうとにものし給へは少将たちもいとしたしくをはするかたみにこのしのひ人もしり給へり

〔考異〕(一)右大将殿、右大臣殿諸本。(二)右大臣、右大将東北大学本。

右の「右大将殿」の本文は神宮文庫本にも見え、函崎文庫本では「この右大臣殿……」の「臣」に他本をもつて「将」と朱の校合をなし、又天理大学図書館本ではそれに「将敷」との不審記号を傍註してゐる。直齋本は「右大臣のきたのかた……」との本文の「臣」の右に「将イ」と異本をもつて朱の校合をなし、無窮会蔵井上頼閑本、岩下貞融本、李花亭本、上野図書館蔵神原本などでは「臣」の右に「将敷」と不審記号を施してゐる。今、本論の四写本の本文に従つて前掲の本文を採用すれば、「思はぬ方にとまりする少将」

の権少将の妹の子であるから、大体二十歳ほど年少の甥で二十一歳の姉妹の所に通ひ、二十歳年長の叔父が十八歳の妹娘の所に通ふことになつて、何んだか落ちつかない感じがする」と述べてゐるが、叙上の氏の推定説を仮りに肯定するならば、前掲の李花亭文庫本及びその系統本の本文を正当と見做すべきである。

次は此等四写本は何れも「よしなしこと」の末文「冬ごもる空のけしきに……」の二百二十九字を缺いてある点を吟味せねばならぬ。堤中納言物語の現存諸写本中、この末文を缺いた写本には、他に吉田幸一氏所蔵本(一冊)があるが、この写本は無窮会所蔵浜臣自筆本と頗る近似した本文であるのみならず、四写本に見える端書も全く同一文章となつてゐる諸点から推定し、或は吉田幸一氏蔵本の書写人林宜儒が、紙を改めて「冬ごもる空のけしきに……」の本文を有する浜臣自筆本か、もしくはこれと同一系統の他本を、書写の際に失念し、または故意に末文を缺いたものかとも考へられる。河嶋家所蔵堤中納言物語本の「冬ごもる……」の末尾に、「此の文跋文の如にて致ならず作者の筆のすさびにやあらん本文に用なき文ながらいづれの文にて皆あれば猶本のまゝに存すべし」と朱記してゐる。これは九州熊本の国学者小山多平理(一八三九—一八九〇)の考按による加筆で、「作者の筆のすさびにやあらん本文に

用なき文」とは、右の小山多乎理一人だけでなく、この末文を缺く書写人も、また斯く誤認し、書写の際祖本に見える「冬ごもる空のけしきに……」の二百二十九字を切捨てたものかとも考へられるし、殊に現存諸本五十数種のうち上記の五写本以外の諸本には、右の末文が見えるばかりでなく、古本に属する善本には、行又は紙を改めて末文が書かれてゐるのである。

元来本物語「よしなしごと」は往来物の系統を引き、その内容は極端に誇張して以外な滑稽味を盛上げた書翰文体であるのに較べ、この二百二十九字の末文は、一見物語の残闕文らしく見せかけた散文詩的文体の冒頭文で、しかも叙景を配した王朝風の趣向を持つてゐるなどから見て、同一篇中に収められた之等兩者の成立は異なる如く考へられるが、この冒頭文中には、千五百番歌合の「今よりは木葉がくれもなければ時雨にのこる村雨の月」といふ具親の歌が引用せられてある資料によつて、この末文の成立は建仁元年（一一〇二）以後と見做される。従つて古体に擬装した作者の意図が問題となる。現に松浦物語の末尾にも、これと類似した趣向の冒頭文のみが添加され「このおくも本くちうせてはなれおちにけりと本に」と記してあるが、両作品の形態を照合して見る時、いづれもその作品を古代の成立に擬装させた作者の技巧的表現である。従つて「よ

しなしごと」の作者は、その作品の末尾に僅か二百二十九字の古体の冒頭文だけを留め「その奥も本くちうせてはなれおちけり」の趣向をとり、物語の成立を古代に擬装させて、伝承による古典的価値を高めようと企図したことが窺はれるが、この点についての委細は立命館文学第九号所載拙稿「堤中納言物語『よしなしごと』に於ける末文の吟味」を参照せられたい。

以上の如く検討してみる時、堤中納言物語の原本には「よしなしごと」の末尾文があつたものを、李花亭文庫本及びその系統本からは脱落したものと推定せざるをえない。

〔昭和廿八年十二月稿〕

心 敬 と 芭 蕉

岡 本 彦 一

一 心敬は「中世の芭蕉」と称せられてゐるということである。心敬を称して「中世の芭蕉」というのは簡明にして適確な表現のようにも受けとれるが、実はこれほどあいまいな表現はない。そもそも近松を目して日本の沙翁としたり、あるいは何々、以下これに類する表現は数多くあるが、一種、新聞の見出し的評語にすぎない。こうした表現には心敬や近松の自家は芭蕉であり沙翁であるという感を伴つてゐる。何となく早わかりするいまわしではあるが、本質にせまつた物言いではない。しかし、こうした表現がされる以上、そこは十分の近似性があるものである。

心敬と芭蕉については、つとに頼原退蔵氏著「俳諧精神の探究」や、荒木良雄氏著「心敬（創元選書）」において詳細に論ぜられており、また、九鬼清氏にも「心敬と芭蕉」と題する論文がある。これは多分、和歌山大学「学芸研究

—人文科学—」の一号に発表されたものだろう。その他、芭蕉を論じて心敬にふれた文章もいくつか読んだ。それ等の論に通じるところのものは、心敬と芭蕉とはその論においても作品においても、時代が離れ、環境を異にしてもかかわらずよく似ていること、芭蕉は心敬の直接の影響を受けているにちがいないこと、しかも、芭蕉が心敬から直接に影響を蒙つたということを決定的に証拠づけることは困難であることの三点に帰着する。

論の展開上、ここに頼原、荒木両氏の業績をふりかえつてみて、心敬芭蕉の相関関係を略述しよう。

頼原氏は「確かに西行と芭蕉、さうして宗祇と芭蕉とのつながりには一般的な伝統を超えた親しきが見られる。しかし心敬との特殊な血脈については、芭蕉自身にそれを示さうとする何の身振も見られない。少くとも彼が西行であ